

## 【暗証聖句】

「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である」マタイによる福音書/ 27 章 46 節

## 【日・幼少時代】

イエス様の生涯は生まれたときから多くの困難がありました。母マリヤは身重の体にもかかわらずベツレヘムまで旅をしなければならず、宿がないためにあてがわれた家畜小屋で出産し、イエス様は家畜のえさ箱である飼料おけに寝かされました。その後、ヘロデ王から命を狙われたために、エジプトにしばらくの間、逃げなければならなくなります。イエス様ご自身は覚えておられないことでしょうし、イエス様ご自身というよりも、両親が苦労したわけですが、このような命の危険が及ぶ幼少時代の出来事は、これからのイエス様の人生を予兆させるものでありました。また、イエス様が育ったナザレという小さな村は、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」(ヨハネ 1 章 46 節)と呼ばれるような、おそらく子供が育つ場所としては、あまり環境的に好ましくないところだったと思われます。イエス様は全く罪のないお方でしたが、絶えず周囲の罪に触れ続けなければならない環境のもとで育つということは、純粋な魂をお持ちのイエス様にとっては、本当につらく、苦しいものだったに違いありません。人類の贖い主であるイエス様が罪を犯すことは絶対に許されないことでしたが、荒野の誘惑と同様に、罪への誘惑は少年時代から容赦なくイエス様を襲ったことでしょう。しかし、イエス様は罪の誘惑に負けることはありませんでした。これは両親の教育と聖霊の特別な守りが、罪の誘惑を退けていったのでした。

## 【月・軽蔑され、拒絶される】

イエス様がなされた行動や言葉は、多くの人を感動させ、救いへと導きましたが、逆に理解されず、誤解されてしまうことも少なくありませんでした。たとえば、目が見えず口の利けない人を癒されたとき、ファリサイ派の人々から「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と、まるでイエス様が悪霊の頭であるかのようにいわれたのでした。また、故郷ナザレで伝道されたとき、イエス様はイザヤのメシア預言の箇所を読み、これをイエス様ご自身に当てはめました。すると、人々はそんなことありえないとばかり、「この人はヨセフの子ではないか」(ルカ 4:22)と軽蔑されました。それに対してイエス様が「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」(ルカ 4:24)と続けられると、人々は皆憤慨し、イエスを町の外へ追い出し、崖まで連れて行き、そこから突き落とそうとした(ルカ 4:28, 29)のでした。また、イエス様が、「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』』と言われたと、「ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエス様に投げつけようとした」(ヨハネ 8 章 59 節)のでした。イエス様は嘘や誇張しているわけではなく、話されることはすべて真実だったのですが、それを受け入れることのできない人々から反発を買い、石を投げつけられそうになったり、崖からつき落とそうとされたりなど、激しい拒絶にあったのでした。イエス様は自分が救おうとされている人々から拒絶されたとき、どのようなお気持ちだったのでしょうか。そのとき、イエス様も何とも感じなかったのではありませんでした。とても心を痛められたのです。「イエス様はエルサレムに近づき、都が見えたとき、その都のために泣いた」(ルカ19章41節)と書かれています。そして、「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった」(マタイ 23 章 37 節)と言われたのでした。私たちも同様に、一生懸命伝道しても、相手から拒絶されたとき、傷つき、悲しくなるものです。しかし、その悲しみは、イエス様ご自身の悲しみでもあることを覚えたいと思います。

## 【火・ゲッセマネのイエス】

マルコによる福音書 14 章 32～34 節に、「一同がゲッセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの 3 人を伴われたのですが、イエス様はひどく恐れでもだえ始め、彼らにこう言われたのです。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい」と。約 33 年の生涯の中で、この十字架の前の数時間前に始まった苦しみほど大きなものはなかったことでしょう。イエス様は何を恐れておられたのでしょうか。何が死ぬばかりに悲しかったのでしょうか。十字架にかかることが怖かったのでしょうか。死ぬことが悲しかったのでしょうか。人間的に考えればそのように思うかもしれません。しかし、イエス様が恐れ、悲しまれたのは、父なる神様から引き離されることだったのです。全人類の罪を一身に背負われたとき、イエス様は神様から引き離されていくように感じたのです。なぜなら、罪とは神様との断絶だからです。イエス様はいつも父なる神様と一つでした。しかし、このとき全人類の罪が、イエス様と父なる神様を引き離そうとしていたのです。イエス様は弟子たちに祈りによって支えてくれるように頼みます。いつも、他者のために執り成しておられたイエス様は、このとき弟子たちに自分のために父に執り成してほしいと願われたのです。イエス様がどれほど大きな試練の中にあっただのかがわかることでしょう。イエス様は、「この杯をわたしから取りのけてください」(マルコ 14 章 36 節)と祈られました。これは父なる神様から引き離されないで済むように、つまり十字架にかからなくて済むようにしてくださいと言う祈りです。この時、イエス様は最大の試練、最大の誘惑をうけて

いたのです。ところがすぐに、イエス様の唇から、「しかし」ともれます。「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコ 14 章 36 節)と付け加えられたのです。激しい誘惑の中で、イエス様は自分の思いではなく、父の思いをなしてくださいと祈られたのです。すると、徐々に恐れや悲しみが和らぎ、力が戻ってきました。誘惑に勝利したのでした。

ところで、弟子たちはイエス様の苦しみを理解せず、祈ってほしいと頼まれたにもかかわらず、深い眠りに落ちていました。霊的眠りとは、目に見えない世界で起きていることの不理解から来ることがわかります。イエス様が私たちのために何をしてくださったのか、いま何をしておられるのか、そしてまもなく何をなさろうとしておられるのかをはっきりと理解したならば、霊的眠りからはっと覚めることでしょう。

## 【水・十字架にかけられた神】

イエス様が十字架にかけられたとき、驚くべき出来事が立て続けに起こります。マタイ 27 章 45 節から52節にかけて次のようにかかれてあります。

「さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。」マタイ 27 章 45 節

「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていて多くの聖なる者たちの体が生き返った。」マタイ 27 章 51、52 節

- ① 真っ暗になった…それは主の心に重くのしかかっている苦悩と恐怖の象徴でした。また、父なる神様が御子の苦しんでいる姿を人々の目から隠されたのでした。
- ② 神殿の幕が裂けた…神殿の垂れ幕というのは、高さが 18 メートル、厚さが 10 センチ。人が簡単に裂けるものではありません。幕が裂けたことの意味は、本物の犠牲がささげられたので、象徴である動物をささげる幕屋の制度は終わったこと。神様と人を隔てるものが無くなったということ。また、ユダヤ人が悲しみを表現する服を裂くという行為から、父なる神様の悲しみを表していました。
- ③ 地震が起こり岩が裂けた…人間の力を超えた神の力を人々は感じたことでしょう。地震で彼らは地に倒されたのでした。
- ④ 墓が開いて聖徒たちが生き返った…「キリストが十字架から「すべてが終わった」と叫ばれた声は死者の中にも聞こえた。その声は墓の壁をつらぬいて、眠っている者たちに起きよと呼びかけた。キリストの声が天から聞こえるときもこれと同じである。その声墓所をつらぬき、墓を開き、キリストのうちにいる死人は起きあがるのである。救い主のよみがえりするときには少数の墓が開いたが、再臨の時にはすべての死せるといふ人々がキリストの声を聞いて、輝かしい永遠の生命にはいるのである。」各時代の希望下 P318, 319

これら一連の出来事は、明らかにキリストの十字架が、一般的な犯罪人の十字架刑と異なることを表していた。

## 【木・苦しまれる神】

パウロは「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならぬ」(使徒行伝 14 章 22 節)「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦しむことも賜わっている」(ピリピ 1 章 29 節)と語っています。私たちは誰もができる限り苦難や試練に合わずに、人生を全うし、天国に入りたいと考えているのではないのでしょうか。しかし、神の国にはいるには、多くの苦難を経なければならぬとはっきり書かれてあるのです。だから、苦難や試練を避ける方法を見出すのではなく、苦難や試練を乗り越える方法を見出すことが大切なのです。苦難や試練に会うとき、私たちはイエス様も同様に苦しまれたことを思い出し、この試練の先には永遠の御国が待っていることを心に留めることが大切です。この世の苦しみがいかなるものであったとしても、私たちには永遠の命が約束されているのです。ヨハネ 10 章 28 節に「わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない」と書かれてあります。このことを常に忘れないことが、何よりも試練や苦難を乗り越える力となるのです。